

〈訳注〉

タキー・アッディーン・アリー・ブン・アビー・バクル・ハラウイー著

『ハラウイーの戦略論』 訳注（3）

谷 口 淳 一

[M: 102; S: 19]

第21章 砦に対する攻撃と包囲、その戦術と戦略¹⁾

自分〔の力〕以上で、自分の軍隊〔が征服できる程度〕より強固であろう砦に対して布陣し、その結果、相手に負かされてしまうことがないように用心するように。王²⁾が自ら布陣し戦争に加わった後に、その場所から退去することは、不名誉であり敗走であるのだから。堅固な砦や近寄り難い辺境の拠点 (taġr) に対しては、力が及び手が届くあらゆることを駆使して、そこの民、兵团、隊長たち、指揮官たちの心を惹きつけ、アミールたちと有力者たちを彼らが望むもので籠絡した後でなければ、けっして布陣しないように。そして、彼らが求めるものを請け合ってやるのだ。以上のことは、彼らに対して軍事行動に出て布陣する前〔におこなうの〕である。活かせる機会や役立つ戦略を見出すかもしれないし、信頼の置ける諜報員や工作員から、「その砦は備蓄品が少ない」「兵員が出払っている」「糧食が少なくなってしまった」「そこには水がない」といったことが伝わってくるかもしれない。そして、その砦へ向けて出発し、そこに対して布陣し、致命的な失敗³⁾を避けるために機会を捉えるように。そこに対して素早く布陣し、進軍するように。攻撃の激しさと

*本稿は『ハラウイーの戦略論』 (*al-Taḡkira al-Harawīya fī al-ḥiyāl al-ḥarbīya*) 第21章～第24章 [S: 19 – 25] の日本語訳注である。原典と著者、訳注作成の方針などについては、「ハラウイーの戦略論 (1)」1頁 (訳者まえがき) を参照されたい。

- 1) 砦に対する攻撃と包囲、その戦術と戦略 (qīṭāl al-ḥuṣūn wa ḥiṣār-hā wa makā'id dālika wa al-ḥīla fī-hi)。
- 2) 本書では、君主を意味する語としてスルターン (sultān) と王 (malik) が用いられているが、異なる存在を示す語として使い分けられているようにはみえない。本訳では、原語に即して訳し分けたが、実際には同じ立場の人物を指している。また、原文において君主が代名詞で記されている場合などは、その地位を訳文に示す必要があれば、注記することなく「王」と記した。

進軍がもたらす苦渋によって、砦に拠る者たちを動転させるように。また、堅実性⁴⁾を失わないように。それによってこそ⁵⁾、勝利が完遂され、求めるものが手に入るのである。[M: 103] 苦難が益につながる場合は、倦んだり苛立ったりせず、それは大したことはないと考えるように。そういったことは、味方を弱体化させ、力を弱めることになるのだから。堅固な砦や近寄り難い辺境の拠点を獲得し、強い圧力をかけて敵を辱め、激しい攻撃でその評判を混乱させ、武力によってであれ和平によってであれ、そこを征服することは、怖気と激しい攻撃と力強い剛勇によってその国を混乱へ導くということを知るように。その後、布陣している砦や [S: 20] 目指す辺境の拠点を襲撃しないでおくように⁶⁾。すると、こちらの王を恐れ、彼の支配を望み、彼の権力に怖気を抱いて、その民が書簡を交換し、幹部が書状を取り交わし、明け渡しを申し出てくるであろう。

ある地 (balad) を手放すまいと心に決めて、支配すべくそこを目指すならば、弱い立場の農民や臣民の安全を保証するように。また、彼らを警護し軍団の害悪から守る者を、彼らの許へ派遣するように。それは二つの利点のためである。一つには、彼らが飼料をもたらし、収穫物⁷⁾や人々が必要とする食糧を軍団に供出することである。もう一つには、包囲された砦や征服された地の民は、このようなことが伝わると、[M: 104] 王が侵略者ではなく支配者である⁸⁾と知るということである。そうすると、彼らは戦意を弱め、気力を減じ、決意が萎え、意見が割れるようになる。そして、砦の民と書簡を交換し、その民と隊長たちと書状を取り交わし、彼らが求めるものを保証してやるように。また、彼らのうちの誰かが王と書簡を交換し、彼に要求しているということ、それ

3) 致命的な失敗 (al-ḡuṣṣa)。原義は「窒息させるもの」、「死の苦しみ」。Sorudel-Thomineは、この語をl'étreinte ennemie (敵に包囲されること)と訳しているが、その理由は示していない [S: 234]。本訳では原義により近い訳とした。

4) 堅実性 (hazm)。ハラウィーは、この語について「熟慮の後に行動することである」と説明している [ハラウィーの戦略論 (1) : 11頁; M: 74; S: 9]。

5) それによってこそ (fa-bi-hi)。S本はfi-hi (その中に)としているが、そのままでは前後の部分とのつながりが解りにくい。当該句の最初のfの文字を接続詞fa (そして/そうすると)とするM本に従って読む。

6) 襲撃しない (lā yaʿab)。S本はlā yaʿab (倦まない)としているが、M本に従って読む。

7) 収穫物 (naʿama)。Dozyはrécolteという訳語を付けている [Dozy, v. 2: 700]。

が誰であるかを特定せずに、彼らに示すように。そのことが隠され、状況が曖昧なままにしておくように。すると、彼らは皆それぞれが、自分の仲間を疑い⁹⁾、王の助けを獲得し自分の支えとするために、自分の優先を求めるようになる。また、あまり労することなく少しの苦勞で目標を達成し、求めるものを手に入れるために、彼らのイクター、国 (bilād)、農村 (diyā') の加増を約束してやるように。司祭や高位聖職者たち¹⁰⁾、彼らの追従者、彼らと同じ道を歩む者との書簡の交換を怠らないように。というのも、彼らは、信仰心に乏しく、弁解¹¹⁾と裏切りを行い、世俗に対する欲望を抱き、来世に対しては禁欲し、軽率、浅薄、輕薄で、世俗の儂きものに執着し、名誉に固執し、諸王や有力者たちの許で優先され、彼ら自身、法学意見¹²⁾においては柔軟な方針に従っているため、彼らを通して王が望む目標すべてを達成するのである。修道士と庵の主¹³⁾には用心するように。彼らを通して王が望むものに達することはなく、[M: 105] 目的を達成することもない。彼らは、力強い信仰と堅い意志 (muska) をもち、世俗には無関心なので、この世の諸事と自分達の状況に拘ることはないのである。私はかつて、このような者たちを、疑い

8) 侵略者ではなく支配者である (mālik^{um} lā muḡīr^{um})。Sorudel-Thomineはこの部分をune occupation définitive (決定的な占領) と訳している [S: 235]。S本はmuḡīrの綴り字yに重子音記号を付していることから、この語を動詞ḡ-y-rの2形受動分詞muḡayyar (変化する) として上記のように訳したものと思われる。本訳では、この解釈では文脈に合わないと考え、重子音記号を除いて動詞ḡ-w-rの4形能動分詞muḡīr (侵略する) として訳出した。なお、M本はこの語をmu'īr (貸与する) としているが、muḡīrの誤植と思われる。

9) 自分の仲間を疑い (yazunnu fī ṣāhib-hi)。ṣāhibは「主人」「仲間」「側近」など様々な関係の相手を意味する語である。ここでは文脈から判断して「仲間」と解釈した。

10) 高位聖職者たち (aṣḥāb al-manāsib)。この句を直訳すると「地位の持主たち」となるが、Sorudel-Thomineが指摘しているように、文脈から判断すると、一定以上の地位にあるキリスト教聖職者を指していると考えられる [S: 235, n. 1]。

11) 'udr (弁解)。M本は背信 (ḡadr) としている。いずれの読みも文脈の観点からは可能である。

12) 法学意見 (fatāwī)。S本はfatā' (若さ) としているが、M本に従って読む。原文中の語は複数形。単数形はfatwā。ファトワーの本来の意味は、法的問題に対してイスラーム法学者が提示する意見ないし裁定である [[「ファトワー」『新イスラーム事典』; 「ファトワー」『岩波イスラーム辞典』]。ここでは、キリスト教の教義や教会法についての高位聖職者たちの見解が「法学意見」(ファトワー) と表現されていると考えられる。

13) 修道士と庵の主 (al-ruhbān wa aṣḥāb al-ṣawāmi')。

もなければ異論もないと私が思う試みによって試したことがあるのだ。

砦を見下ろす高い地点に布陣するように。可能ならば、そこに対して糧食補給を妨げ、水を断つように。砦の周囲を調査するように。誰にも気付かれず、諜報員にも知られずに、その脆い場所を見つけ、弱い地点を見出すように。そして、勇気で知られ、力強いと評された名高いアミールと高名な騎士のうちのある者に〔攻撃を〕命じるように。装備、諸道具、[S: 21] 胴鎧、鎖帷子、火炎瓶 (qawārīr al-naft)、武器および進軍と突入のための装置全て、すなわち梯子、綱、鶴嘴、槌、槍、槍先¹⁴⁾、凧型楯、凧型平底楯、[M: 106] 鉤繩¹⁵⁾、防御柵、破城槌¹⁶⁾、可動式攻城塔¹⁷⁾といったものを彼に提供するように。

前述のアミールは、求める地点、目指す場所の近くに布陣させるように。戦意を喪失したり混乱が生じたりしないよう、彼の側近と軍団の閲兵をするように。そこに対する敵の警戒を薄れさせ、そこから彼らを逸らせるために、〔攻撃目標であると〕周知の箇所、前述の場では〔彼以外〕誰にも戦闘を行わせないように。王は、〔守りが〕最も強い地点、〔攻めるのが〕最も困難な場所、〔守りが〕強固な側、守られている方面を目指し、そこで戦闘を仕掛け、敵に絶え間なく戦火を浴びせかけ、進軍によって苦しみを味わわせるように。そうすれば、必ずや、敵どもは戦闘が行われている方向、戦いが生じ〔主力軍が〕布陣している場所に引きつけられ、砦の他の部分から離れてしまう。また、不注意が彼らを支配し、乱心が征圧し、狼狽が捉え、災禍が彼らを当惑させることになる。

14) 槍先 (‘awālin)。文中の語は複数形。単数形は‘aliya。S本では、直前の単語 al-rimāh (槍) との間に接続詞が記されていないが、M本に従って接続詞 wa (〜と) を補って読んだ。

15) 鉤繩 (kalālib)。文中の語は複数形。単数形はkullāb。原義は鉤であるが、兵器としては鉤を先端に付けた鎖や縄または縄梯子を意味するという al-Murābiṭ の説明に従って訳した [M: 84, n. 1]。

16) 破城槌 (kibāš)。文中の語は複数形。単数形はkabš。原義は雄羊であるが、ここでは本書第13章にみえる alat al-nuqūb と同様の兵器を意味していると考えられる。すなわち、鉄製の鋭利な先端部が取り付けられた木製の柱状の兵器で、馬などによって牽引し城壁に打撃を与えた。先端の形が雄羊の頭に似ているという [ハラウィーの戦略論(2): 2-3頁注18; M: 83-84, n. 6, 106, n. 3]。

17) 可動式攻城塔 (zahhāfāt)。文中の語は複数形。単数はzahhāfa。トカゲのような地面を這う動物を意味する語であるが、ここでは alat al-zahf や burġ al-zahf と呼ばれた攻城塔を意味していると考えられる。攻囲戦において城壁を攻撃するために用いられた塔で、兵士が押して移動した [M: 106, n. 4; Dozy, v. 1: 581-582]。

以上の遂行によって、おそらく前述のアミールは、[M: 107] 城壁のうちの指示された方面を支配し、対壕兵が城壁に突入し、兵員がそこを征圧するであろう。その時に、不注意にならぬよう気をつけるように。また、時間をかけないよう用心するように。さもなくば、敵どもが気づき、眠りから目覚めるかもしれない。否、彼らが死を目撃し、恐ろしさが彼らを当惑させ、恐怖が激しくなり、不安が大きくなるように、進軍による苦しみと戦闘による苦難を彼らに味わわせるのである。そうすれば、疑いなく、彼らは安全の保証を求め、スルターンに保護を求めてくる。彼が望めば彼らに安全を保証してやり、また、彼らを支配するのである。[M: 108]

第22章 力の後に温情を示し名声を追求すること¹⁸⁾

スルターンは、幸運が彼に結びつき、神慮が彼を助け、神意による成功が彼を導いたときには、力とともに温情を用いなくてはならない。また、古くからの家系、確固とした根幹と成長する分枝の持主たちに慈悲をかけ、栄誉の後に落ちぶれ、富裕の後に貧しくなり、身を引く時が来て、[S: 22] 親友たちに見捨てられた者に慈悲をかけるべきである。それは、王が永らえることへ熱望が集まり、その王朝が永続し、その王権が磐石のものとなるよう多くの祈願が彼のために行われるようにするためである¹⁹⁾。不当な行為に及ばぬよう用心するように。それは致命的なことになる。王は、自分より〔立場が〕劣る者を追及しないようにすべきである。それは、追及される者の正義を完全にし、追及する者の正義を減じるからである。相手の価値を無視するがゆえにしろ、彼に慈悲をかけるがゆえにしろ、その人物に構わないように。次のように言われている。

1 匹の兎がそばを通り過ぎたとき、獅子が両目を閉じた。それは、兎を見下げたためとも慈悲をかけたためとも言われている。[M: 109]

18) 力の後に温情を示し名声を追求すること (isti'māl al-ḥilm ba'd al-qudra wa al-muḡābara 'alā al-dīkr al-ḡamil)。

19) 熱望が集まり…ためである (li-taḡtami'a al-himamu)。「集まり」と訳した動詞は、S本ではyaḡtami'aという未完了接続形の3人称男性単数形となっているが、主語の「熱望」が複数であることから、M本が示している3人称女性単数形の方が文法に合致する。

第23章 敵に包囲された際の戦略とその実行²⁰⁾

敵が王を目指してきた時に、そ〔れに対抗するだけ〕の力が彼になく、押し返すことも迎え撃つこともできない場合は、我らが先に語り記したことのうちで可能なこと、手が届くことすべて〔を実行すること〕で、すみやかに兵団〔の待遇〕を改善し、側近や軍団の隊長たち、臣民の心を惹きつけるように。そして、取り巻きと王朝の要人のうち見識の持主や経験豊富な者たちに助言を求めるように。また、彼らの心が抱えていること、彼らの舌が語ることに注意するように。そして、歪んでいることが判った者は真っ直ぐにしてやり、逸れている者は正してやり、弱気になっている者は勇気づけてやるのだ。

城壁、塔、狭間²¹⁾、小窓²²⁾、投下²³⁾ 場所を点検し、それらの破損を改修して、諸門を補強し、信頼し頼りにしているアミールたちにそれらを委ねるように。[M: 110] 敷設兵、対壕兵、弩射兵、火炎放射兵、投石機操作兵、優れた兵員の心を惹きつけるように。彼らのことを疎かにしないよう、注意するように。

自らの地の近くにある建物を破壊するように。そして、その地の石を自分の砦へ運び込むように。石は、無能な者にとっても能力のある者にとっても最も役立つ備蓄品である。木材や橋梁²⁴⁾、敵に利用されるものをすべて切断し、砦に備蓄する²⁵⁾ ように。

急いで井戸を埋め、貯水槽と貯水池を破壊するように。そこに毒がまわった死体、死に至らしめる水、純化した砒素²⁶⁾ を投入するのだ。敵の

20) 敵に包囲された際の戦略とその実行 (al-hīla idā ḥāšara-hu 'adūw-hu wa al-'amal fī dālika)。

21) 狭間 (marāmī)。本文中の語は複数形。単数形はmarmā。

22) 小窓 (tāqāt)。本文中の語は複数形。単数形はtāqa。弓状の屋根という意味もあるが、ここでは小さな開口部という意味のようである [M: 109, n. 4]。マムルーク朝時代には、通気孔という意味でも用いられていた [Amin and Ibrāhīm 1990: 75]。

23) 投下 (tallāqāt)。本文中の語は複数形。単数形はtallāqa。ここでは、石やナフト(焼夷性物質)を投下することを指している [M: 109, n. 5]。

24) 橋梁 (ḡsūra)。橋 (ḡsir) の複数形 (ḡsūr) の異形であろう。

25) 〔それを〕備蓄する (yaddaḥīru-hu)。S本はyudāḥīru (2形) としているが、M本は8形動詞に目的語を示す代名詞を付している。文脈および文法の観点から、M本の読みに従った。

布陣場所に駱駝、馬、騾馬、犬などの遺体や死体、汚物を投げ込むように。それらを風上に置くように。というのも、そうすれば疫病や [S: 23] 病気、空気の変化を引き起こすからだ。

各地の濠を疎かにしないよう注意するように。それらは、最も大事な設備、重要な事柄の一つである。濠を掘り、広げ、深め、補強するように²⁷⁾。それは、包囲された無能な者にとって最も役立つ砦である。[M: 111]

敵の軍団に虚偽情報を広める者たちを派遣するように。これは、彼らの国について、また農村の荒廃、一族の死、総大司教の破滅、司教の離反についての虚偽情報、動揺させる虚偽情報と悪い夢の多さで兵士たちの心を動揺させるためである。これは、敵どもの戦意を弱め、熱意を錯乱〔によって萎え〕させ、心を弱めることになるのだ。彼らの状況が求めることや彼らの本性が好むことについて、敵の軍団のアミールたちと書状を取り交わし、隊長たちと書簡を交換するように²⁸⁾。これは、彼らの言葉が食い違い、彼らの見解が迷走するようにするためである。また、〔自軍の〕堅固さと力、力強さを示し、敵側の方面にはほとんど注意を向けていないと見せ〔掛け〕るように。

斥候を派遣するように。諜報員を送り込むように。自らの地から1日行程も残っていないところまで敵が接近したならば、伏兵たちを潜ませるように。軍団の一部を送り出し、軍隊からあらゆる名高い騎士と高名な勇者を選抜するように。そして、敵の軍団が布陣しているところを、同行者全員で急襲し、恐ろしい攻撃と不愉快な一撃を加え、伏兵が後に続くように。数多くの [M: 112] 矢²⁹⁾、火器³⁰⁾、架台付き弩³¹⁾を放つように。このようなことが生じれば、布陣している軍隊が無事であることはほと

26) 砦素 (zarānīḥ)。これは辞書に見出せない綴りであるが、M本の脚注にあるように、zarnīḥの複数形であろう [M: 110, n. 6]。

27) 掘り…ように (li-yahfir)。S本はli-yahdar (用心するように) としているが、M本に従って読む。

28) 書状を取り交わし…ように (li-yurāsīl)。S本は、li-yursīl (派遣する…ように) としているが、M本に従って読んだ。「書状を取り交わす」と「書簡を交換する」(kātaba) との組み合わせは、本訳20頁にもみられる。

29) 矢 (nuššāb)。ペルシア式の矢という意味もあるが [“Kaws,” EI2, v. 4: 799a]、本書での意味は特定できていない。

30) 火器 (ālat al-nār)。原義は「火の装置」。火炎放射兵 (zarrāq) が操作する兵器のことであろう [ハラウィーの戦略論 (2): 2頁; アルハサンほか1999: 144]。

んどないのである。ただし、諸門に守備する者を置かず、城壁に兵員を置かず、その地に統率者を置かないままにして、以上のような命令を執行してこのような状況を追求する³²⁾ ことがないように注意するように。さもなければ、このような命令は不利に働くかもしれない。つまり、敵がその地を目指してきて、この命令以外には防備が固められていないことに気付く³³⁾ かもしれないのである。否、堅実性、結果の注視、〔攻め込まれたときに〕恐怖が先行することの承知を拠り所とするのである。経験には限りがなく、知性ある者は経験を積み重ねる。

もしも敵が王を恐れたならば、彼は敵を制することができる。もしも敵が恐れなければ、その者が王を脅かすことは避けられず、急いで濠を守備し、城壁を警備するように。力が及ばない重大事態を除いて、濠の橋梁を断たないように注意するように。秘密の諸門を封鎖しないよう用心するように。そのようなことは、[M: 113] 敵の欲望を増大させることになるのだ。可能ならば、侵入地点 (ma'ḥad) [と予想される場所] に近い場所の周辺に撒菱を撒き、敵どもが投石機を設置することや、攻城塔³⁴⁾ による前進、破城槌を用いた進軍をできないようにするようになる。[S: 24] そのような場所を確保せずに投石機が砦を制することはほとんどない。穿孔に用心するように。侵入地点に穴を開けられた場合は、急いでそれを埋め、その中にいる者を焼くように。

月末の数夜³⁵⁾ のうちの暗い夜の絶好の時 (sā'a muḡannama) を待つ

31) 架台付き弩 (qusīy al-ziyār)。本文中の語は複数形。単数形はqaws al-ziyār。巻上げ機で歯車を動かして弓を引く方式の兵器で、サラーフ・アッディーン軍と十字軍との戦闘で用いられたとされる [アルハサンほか1999: 137 - 138頁; "Kaws," EI2, v. 4: 798a]。

32) この状況を追求する (yarutakibu hādā al-hāl)。S本はyarutakibu [fi] hādā al-hālと前置詞fiを補っているが、M本に従い前置詞を補わずに読む。

33) 敵が…この命令以外には防備が固められていないことに気付く (lā yaḡidu dūna-hu māni³⁶⁾)。S本では、下線部分がyaḡidūna-huと記されており、3人称男性複数形の動詞に3人称男性単数の接尾代名詞が付される形になっている。しかし、この動詞の主語は、直前の文に見える'adūw-hu (彼の敵) という単数の名詞であるため、文法上の齟齬が生じている。したがって、類似した綴りを3人称男性単数形動詞と前置詞句に分ける形で読んでM本に従って解釈した。

34) 攻城塔 (burg)。一般には建築物としての塔を意味する語であるが、文脈から戦闘用の攻城塔と解釈した。al-Murābiṭも同様の解釈を注記している [M: 113, n. 2]。ただし、可動式攻城塔と訳したzahhāfa [本訳22頁注17] と同一のものを指しているかどうかは不明である。

ように。そして、飾り立てた馬³⁶⁾の中から、たとえ何が出来たとしても、役に立たないという、従わせるのが難しい馬を送り出し、あらゆる方面から出撃させるように。[M: 114] それらの馬とともに兵員たちを出撃させ、勇者たちを送り出し、乾燥した水牛³⁷⁾の革〔紐〕と貯蔵していた野山羊³⁸⁾の革〔紐〕を馬の尾に縛り付けておくように。彼らは〔革紐を握り、〕馬を鞭で追い、打って痛めつけ、罰として苦痛を与え³⁹⁾、大きな怒鳴り声、恐ろしい音、不愉快な叫び声で促し、最後は敵の陣地にそれらの馬を放つのである。そして、〔敵の〕軍団⁴⁰⁾が混乱し、騒ぎ立て、狼狽するのを見届けたならば、あらゆる方面、場所から、騎士たちが攻め込み、勇敢な者たちが急襲するように。火器と投擲ナフト⁴¹⁾を多用するように。それには、臆病者の心を恐れさせ、人の心臓を縮みあがらせる威力がある。さらに、伏兵を丘や山裾の後ろに置いておく。彼らに攻撃を正確に実行させるように。彼らに作戦を忠実に実行させるように。以上は、偉大な策略、恐ろしくて大規模な戦略であり、それを仕掛けられて無事である軍団はなく、粉碎されることは避けられず、それから逃れる軍隊はまれにしかないのである。

敵を粉碎したならば、目的のものを手に入れ、願望を達成したことになる。たとえ、努力を尽くしたのち、目標を達成しなかったとしても、必ずや敵の戦意を弱め、[M: 115] その軍隊を弱体化し、敵の状況を悪化させることになる。というのも、この戦略は弱い心を掻き乱し、勇敢

35) 月末の数夜 (layālī al-sarār)。太陰暦であるヒジュラ暦の月末は、月の出が未明となる。したがって、月末の数夜は月明かりのない暗い時間が長く続くことになる。

36) 飾り立てた馬 (al-ḥayl al-tawāsin)。「飾り立てた」と訳したtawāsinという語は、辞書に見出すことができなかつたため、al-Murābiṭの注記に従って解釈した[M: 113, n. 6]。

37) 水牛 (ḡawāmīs)。本文中の語は複数形。単数形はḡāmūs。

38) 野山羊 (aw'āl)。本文中の語は複数形。単数形はwa'āl。

39) 〔彼らはそれらの馬に〕罰として苦痛を与え (yu'limū-hā 'uqūbat⁴⁰⁾)。S本は、動詞(下線部)をyūlimū(ごちそうを与える)としているが、文脈を考慮に入れてM本の読みに従った。また、罰の理由は明記されていないが、これらの馬を従わせるのが難しかったことがその理由であろう。

40) 〔敵の〕軍団 (al-'askar)。M本はal-mu'askar (〔敵の〕軍营地)としている。

41) 投擲ナフト (al-naft al-tayyār)。原義は「飛ぶナフト」。容器に入れて手や弓、発射装置などで投擲するナフト(焼夷性物質)のことであろう [アルハサンほか1999: 142-144; M: 114, n. 3]。

な姿は、動きはあるがはっきりしない場合〔でも〕、恐慌をもたらすからである。その結果、果敢さは断たれ、恐怖が激しくなるのである。アレクサンドロスがこのように語ったと言われている⁴²⁾。

もしも、敵どもが目にしたこれらの策略や戦術遂行が彼らを追い払わなかった⁴³⁾ならば、砦の守備、城壁の警備、弓射手の配備、防御壁⁴⁴⁾の設置、投石機の点検に注力するように。〔敵からの申し入れに〕回答する場合以外には、敵に使者を送らないよう用心するように。というのも、そのようにすることは、王の立場の偉大視、その砦の力強さ、敵をほとんど気にしていない〔ように見せ掛ける〕ことにつながるからである。また、敵に対抗すべく、各地の支配者、敵の敵対者の軍団、敵国の近隣の者たちに、援助を求めるように。彼らに敵の支配地を包囲させ⁴⁵⁾、その方面を目指させるように。ただし、私としては、戦略を用いて敵を籠絡し、狡知を用いて妨害する方が、他者の兵団、軍団に援助を求めるよりもよいと考える。というのも、敵に対抗すべく援助を求める相手が、王に弱さと無能を見出すに違いないからである。その結果、王に対する欲望が彼を捉えることになり、いつか彼が王を害することになるかもしれないのである。[M: 116; S: 25]

第24章 勝算が無く戦略が尽きた時は決然とすべきこと⁴⁶⁾

たとえ全滅が迫っていようと、死を目の当たりにしよう、敵に実直、誠心、信仰心を見出した場合以外は、敵に降伏しないよう気をつけるように。そうしてしまったならば、後悔することになるが、後悔は役に立たず、失敗に終わることになる⁴⁷⁾。そして、アッカー（‘Akkā）の市街に

42) アレクサンドロスが語った言葉とされる文言の範囲は不明。出典も不明である。

43) 彼らを追い払わなかった (lam yazu‘hum)。M本は、lam yaru‘hum (彼らを驚かさなかった)としている。

44) 防御壁 (satā‘ir)。本文中の語は複数形。単数形は sitara。木材などで作られた壁で、砦や城壁の防衛に当たる兵士の防御に用いられたという [M: 115, n. 1]。

45) 彼らに…包囲させ (wa-l-yaḥtaffū)。M本は、wa-l-yuḥifū (彼らに…脅かさせ)としている。

46) 勝算が無く戦略が尽きた時は決然とすべきこと (al-‘amal bi-l-ḥazm idā ‘adima al-nuṣra wa dāqat ḥiyal-hu)。

47) 失敗に終わる (yazullu bi-hi al-qadam)。直訳すると「彼の許で足が滑る」となる。

において、フランクの諸王、キリスト教の司祭たち⁴⁸⁾——至高なる神が彼らを見捨てんことを——との間で、ムスリムの騎士たち、神の唯一性を信じる勇者たち⁴⁹⁾に生じたようなこと⁵⁰⁾が生じることになる。榮譽とともに死ぬことは誉れであり誇りであり、恥辱とともに生きることは、無能であり屈従であることを知るように。次の句を詠んだ者の何と立派なことか。

鋭き白刃によって斬殺されることは欠点ではない

それが榮譽と誇りを欠いていなかったならば [M: 117]

我らは死を屈辱と考えない人間だ

それが白刃と葦の柄の槍の間で生じたことであるならば

用心しても運命が降りかかることは防げないということを知るように。

何と多くの駿馬が倒れ、何と多くの穩健な者が

失敗し、何と多くの耳が注意深い者を裏切ることか

この句とその上で我々が述べた行は、『同朋の交際に関する当代の規範の書』⁵¹⁾の中にある。

本書は、有益な覚え書き、深遠な勧告であり、教養のある者がそこから益を得、有能な者がそれによって高められる。また、スルターンが刃向かう相手に対抗すべくこの書に援助を求め、王が敵対する相手に対抗すべくそれに援助を求めるのである。[M: 118]

48) キリスト教の司祭たち (qusūs al-naṣrānīya)。この語句は、M本では欠落している。

49) 神の唯一性を信じる勇者たち (abṭāl al-muwaḥḥidīn)。「神の唯一性を信じる」者という表現は、特殊な意味を含む場合もあるが、本書ではムスリムの同義語として用いられているようである。

50) これは、イギリス王リチャード1世らが率いた第3回十字軍によるアッカー征服(587/1191年)後の状況についての言及であろう。交渉の結果、賠償金の支払い、キリスト教徒捕虜の解放、真の十字架の引き渡しなどを条件に、アッカーに残っていたムスリムは安全に退去できることになった。しかし、陥落から1ヶ月を経過してもサラフ・アッディーン側が講和条件を履行しなかったため、リチャードは3000人のムスリム捕虜を殺害した。ハラウィーはこの惨劇を引き合いに出して、十字軍勢力は安全を保証したにもかかわらずムスリムを殺害したと述べているのであろう。しかし、この事件については、サラフ・アッディーン側が講和条件の履行を先延ばしにしていたのも事実であり、ハラウィーが示唆するように十字軍側が一方的に取り決りを破ったというわけではない [Lyons and Jackson 1982: 330–333]。

51) 『同朋の交際に関する当代の規範の書』(Kitāb Mi'yār al-zamān fī mu'āṣirat al-iḥwān)。不詳。M本の校訂者al-Murābiṭは、この書物に関する情報を見つけられなかったと述べている [M: 117, n. 3]。

本書は、神のお蔭で書かれたもの⁵²⁾である。神が委ねたもの、恵んだもの、与えたものについて、神に称えあれ。神が、我らが主人にしてウンマの預言者とその一族、教友たちに最後の審判の日⁵³⁾まで続く祝福を与えんことを。力と強さは、高く偉大なる⁵⁴⁾神とともにのみあり。神は、我々にとって十分であり、なんと素晴らしい保証人であることか。世界の主、神に称えあれ。

52) 神のお蔭で書かれたもの (mā fataḥa bi-hi Allāhu)。

53) 最後の審判の日 (yawm al-qiyāma)。M本はyawm luqyā-hu (神にまみえる日)とする。

54) 高く偉大なる (al-'alī al-'aẓīm)。M本ではこの句が欠落し、そこにはwa na'ūdu bi-Allāhi min al-taṭwīli (そして、我らが冗長にならぬよう、神に救いを求める)というS本にはみえない句が記されている。

文献および略称

辞典類

大塚和夫ほか編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、2002年。【岩波イスラーム辞典】

日本イスラーム協会監修『新イスラーム事典』平凡社、2002年。【新イスラーム事典】
Dozy, Reinhart Pieter Anne. *Supplément aux dictionnaires arabes*. 2 vols.

Leyde: E. J. Brill, 1881. Beyrouth: Librairie du Liban, 1981. 【Dozy】

Gibb, Hamilton Alexander Rosskeen, et al., eds. *Encyclopaedia of Islam*. New edition. 12vols. and index volume. Leiden: Brill, 1960 – 2009. 【EI 2】

『ハラウイーの戦略論』校訂・翻訳

al-Taḥkīra al-Harawīya fī al-ḥiyal al-ḥarbīya. Ed. Muṭī' al-Murābiṭ, Dimašq: Wizārat al-Taḥāfa wa al-Iršād al-Qawmī fī al-Ġumhūrīya al-'Arabīya al-Sūrīya, 1972. 【M】

“Les conseils du Šayḥ al-Harawī à un prince ayyūbide.” Ed. and trans. Janine Sourdel-Thomine. *Bulletin d'Études Orientales* 17. Institut Français de Damas, 1962, pp. 205 – 266. 【S】

*校訂テキストは解題・翻訳とは逆順（右始まり）で収録されている [pp. 242 – 266]。本稿でテキストの頁を示す場合は、テキスト部分に付された頁番号（1 – 25）を示す。

「タキー・アッディーン・アリー・ブン・アビー・バクル・ハラウイー著『ハラウイーの戦略論』訳注（1）」谷口淳一訳『京都女子大学大学文学研究科研究紀要 史学編』23号、2024年：1 – 16頁。【ハラウイーの戦略論（1）】

「タキー・アッディーン・アリー・ブン・アビー・バクル・ハラウイー著『ハラウイーの戦略論』訳注（2）」谷口淳一訳『京都女子大学大学文学研究科研究紀要 史学編』24号、2025年：1 – 14頁。【ハラウイーの戦略論（2）】

研究

アルハサン、アフマド Y.・ヒル、ドナルド R.『イスラーム技術の歴史』多田博一・原隆一・斎藤美津子訳、平凡社、1999年。【アルハサンほか1999】

Amīn, Muḥammad Muḥammad and Ibrāhīm, Lylā 'Alī. *al-Muṣṭalahāt al-mi'mārīya fī al-waqā'iq al-Mamlūkīya*. al-Qāhira: Dār al-Našr bi-al-Ġāmi'a al-Amrīkiya bi-al-Qāhira, 1990. 【Amīn and Ibrāhīm 1990】

Lyons, Malcolm Cameron and Jackson, David Edward Pritchett. *Saladin*:

The Politics of the Holy War. Cambridge: Cambridge UP, 1982. Canto edition, 1997. 【Lyons and Jackson 1982】

※ 【 】内は略称。